

## 「激化する国際資源獲得競争と日本型・遠洋漁業の限界—まぐろ漁業の視点から—」

責任あるマグロ漁業推進機構専務理事

原田 雄一郎

高度回遊魚・まぐろは、各地域漁業管理機関で管理される国際資源である。近年、貿易商材として、需要が増大、それに伴い漁獲も急増している。また、その持続的利用を確保するためには、その過剰利用の抑制が急務であるとの認識が、国際社会の共通のものとなっている。しかし、実効あるグローバルな対策は、各国の利害が対立し、OPRTによる世界の大規模延縄漁船の抑制措置以外、導入されていない。

実質的に、最後の日本の遠洋漁業と言われている日本の遠洋まぐろ延縄漁業の衰退は、これまでの日本の遠洋漁業の在り方が、限界に達したことを示しているように思える。日本型遠洋まぐろ延縄漁業は、過去、官主導もしくは官民一体となった海外漁場の確保・漁獲枠の確保に、象徴されるが、「中国型遠洋まぐろ漁業（強力な国の方針に支えられた発展）」や「台湾型遠洋まぐろ漁業（民間の自らリスクをかけた発展）」に、抜きさられかねない。

日本の遠洋まぐろ延縄漁業が、存続するには、今や「中国型」は望むべくも無く、「台湾型」を目指す他あるまい。しかし、世界各地に根をおろした華僑社会の力を駆使して、柔軟に、強靱に、問題に対処してゆく台湾のあり方を、日本が一朝一夕に自分のものとするのは困難であろう。日本は、国際資源を自ら漁獲・利用することなく、消費国としてのみ存在することとなっても良いのだろうか？